

2019年11月10日(日)／説教者：國分美生

説教：「イエス・キリストと人権」

聖書：マタイによる福音書15:21～28

2019年の世界バプテスト連盟の女性部による世界祈禱日プログラムのタイトルは、「起きよ、光を放て～私たちが起きて立ち上がる時、奉仕を通して主が輝きだす～」。キリストとの出会いが、私たちを「神を愛し、隣人を愛する」奉仕活動に押し出していくということかもしれません。

イエスはガリラヤから出て、テュロスとシドンの方へ退き、そこでカナンの女性と出会います。彼女はおそらくイエスがこの地方に向かってきたと聞きつけて、イエスを目指して出てきました。イエスとこの女性との間には何重にも境界線がありました。彼女は外国人で、悪霊に取りつかれた娘がおり、女性であったからです。この三点のいずれも、この時代は差別の対象でした。しかし何重もの境界線を越えるようにして、女性はイエスに「娘を治してくれ」としぶとく食らいつきます。22節で「主よ、ダビデの子よ」と呼びかけているように、イエスがイスラエルに遣わされた救い主であることを信じていました。ですがユダヤ人同胞への福音宣教に頭がいっぱいだったイエスは、彼女に冷淡です。「子どもたちのパンを奪って子犬たちに与えてやるのはよくない」…外国人であるあなたには救いを与えられる権利はないのです。しかし彼女は引き下がりません。「ええ犬で結構です。でも子犬たちでさえも主人のテーブルから落ちる、パンの食べくずにはありつきます。」と、イエスに詰め寄ります。彼女は人間としての権利を主張しましたが、その行動の根底にはイエスが真の癒し人、救い主であることを信じて疑わない信仰がありました。彼女の揺るがぬ信頼が、イエスを変えることになりました。「おお！ご婦人よ。あなたの信頼は偉大だ。」とイエスは応え、そして女性の娘は癒されました。

イエスがこのカナンの女性の方に踏み出したことは、イエスが最も疎外されている者の側に立つお方であることをあらわしているように思えます。そしてそれこそが福音の本質といえるのではないのでしょうか。命に至る道がイエス・キリストにあると信じる信仰と、人権に対する意識は深いところでつながっています。自分の命を生かす道を求める姿勢は、やがて自分の隣人の命を生かすエネルギーとなっていきます。

私たちの命を脅かす勢力が立ち上がる時があります。けれどイエス・キリストはその闇に既に勝っており、命のために働いています。その働きに私たち教会も加わっていきましょう。(国分美生)